＜協議主題＞　幼児教育と小学校教育への円滑な接続の推進について

Ⅰ　湯本幼稚園の実態

・極小規模幼稚園：年長児１名、年中児１名、年少児１名　　複々式学級　　担任は１名

・湯本小学校に併設されている。また、園長は小学校校長を兼務していることにより、幼小連携がしやすい環境にある。

・地域を散策し人々とのふれあいを楽しんだり、地区の行事に参加したりしている。

Ⅱ　研究内容

１　幼児教育施設と小学校間における相互理解の促進

２　架け橋期カリキュラムの開発・実施

Ⅲ　取組の実際

１　幼児教育施設と小学校間における相互理解の促進

【研究の視点】　◎　湯本幼稚園の実態を生かした小学校との学び合い

湯本幼稚園・湯本小学校とも少人数であることを強みととらえ、連携に向けた話し合いが容易にできる環境にある。幼稚園と小学校と同じ活動に取り組むが、活動に対してのねらい・到達点は、発達段階によって違うということをお互いに確認し、実践を行った。

⑴　行事等の関連を明確にした教育課程の編成と交流

①　子どもたちの日常的な関わり

日常的な幼小連携・・・毎日の朝の会の共同実施・休み時間の交流・図書室の利用等

＜園児の誕生を祝う＞

＜小学生が遊びに参加＞

＜プールも一緒＞

②　季節の行事に小学生を招待

＜餅つき＞

＜団子さし＞

＜小学校の調理実習に参加＞

③　小学校学校行事と共同開催

ア　入園式に小学生が参列
イ　始業式・終業式の参加
ウ　湯本地区合同大運動会
エ　合同避難訓練の実施
オ　地域の文化祭への参加
カ　ゆもとっ子祭りの参加

・教育課程を編成する際に、年間行事予定を合わせ、小学校の行事に参加できるようにした。
・特に年長児は、小学校に入学後の取組について見通しを持つことができた。

⑵　園児による小学校の授業参観や学習活動への参加

活動内容によって国語・音楽・生活・外国語活動に参加する機会を設けた。小学校の児童にとっても、友達と活動できる楽しさを味わうことができた。

【音楽の授業】

【外国語の授業】

音楽では、鑑賞の時間に参加。曲調に合わせて動く
外国語では、簡単な英語を使ったゲームを楽しむ

⑶　学校通信やポータルサイトを利用した園活動の情報発信

学校だより

未来への夢や目標をもち、心豊かで、たくましい子どもの育成
湯本小学校だより
令和６年７月２日（火）　第８号　発行者：湯本小学校長　柳沼信之
天栄村教育ポータルサイト（湯本小 HP）
自分の安全を守るための学習
６月２５日（火）に、天栄村の幼稚園・小学校・中学校一斉に「合同引渡し訓練」が実施されました。自然災害の危機が生じると判断し、早急に避難することが安全である場合、保護者の方にメールを配信し学校まで迎えに来ていただくという訓練です。
湯本小学校・幼稚園には、湯本分遣所の消防士さんや湯本駐在所長さんが来校され、訓練の様子を見ていただきました。
いつになく緊迫した雰囲気の中で、お家の方を待つ子どもたち。
お家の方がお迎えに来ると、緊張がほぐれ笑顔が浮かびました。
本校では、消防士さん、お巡りさんがいつも見回り安全を確保してくださっています

ホームページ

⑷　園児・児童の姿、育ち、関わり方等に関して情報共有がしやすい関係づくりの醸成

幼稚園教諭と小学校の管理職を含む先生方との話し合いの機会を設け、子どもたちの情報交換を行ったり、取組に関するお互いのねらいを確認したりしながら、連携して教育活動をすすめるようにした。

小学校学習指導要領に係る研究会

幼稚園から高等学校までを貫く３つの資質能力の育成に向け、お互いの取組を理解し合った。

2　架け橋期カリキュラムの開発・実施

【研究の視点】　◎　アプローチカリキュラム作成に向けたマトリックス作成と実践

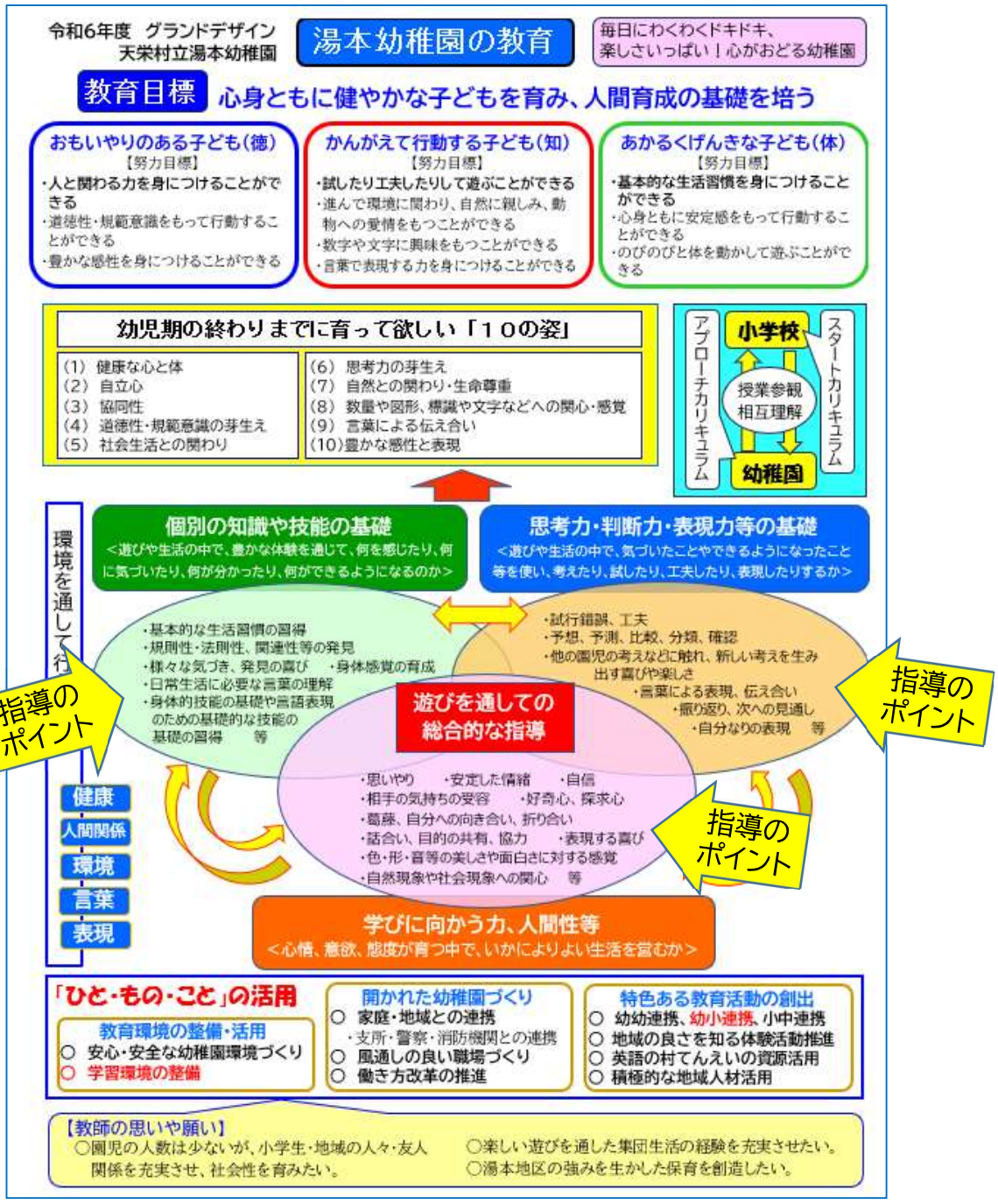
小学校併設型の幼稚園なので、日常的に小学生と関わる機会は多い。活動を共に行うことは容易だが、幼小連携ありきの保育であってはならない。３歳・４歳・５歳の発達段階や個々の姿を踏まえ、目の前にいる子どもの保育内容の充実、教師の関り方の工夫を重ねていくことが大切だと考え実践を行った。

⑴　令和６年度湯本幼稚園グランドデザインの見直し

＜改善の視点＞

①　小学校のグランドデザインに合わせた、「徳・知・体」で求めようとする子どもの姿とその手立ての明記

②　幼稚園での教育活動で育成が想定される３つの資質・能力の具現化



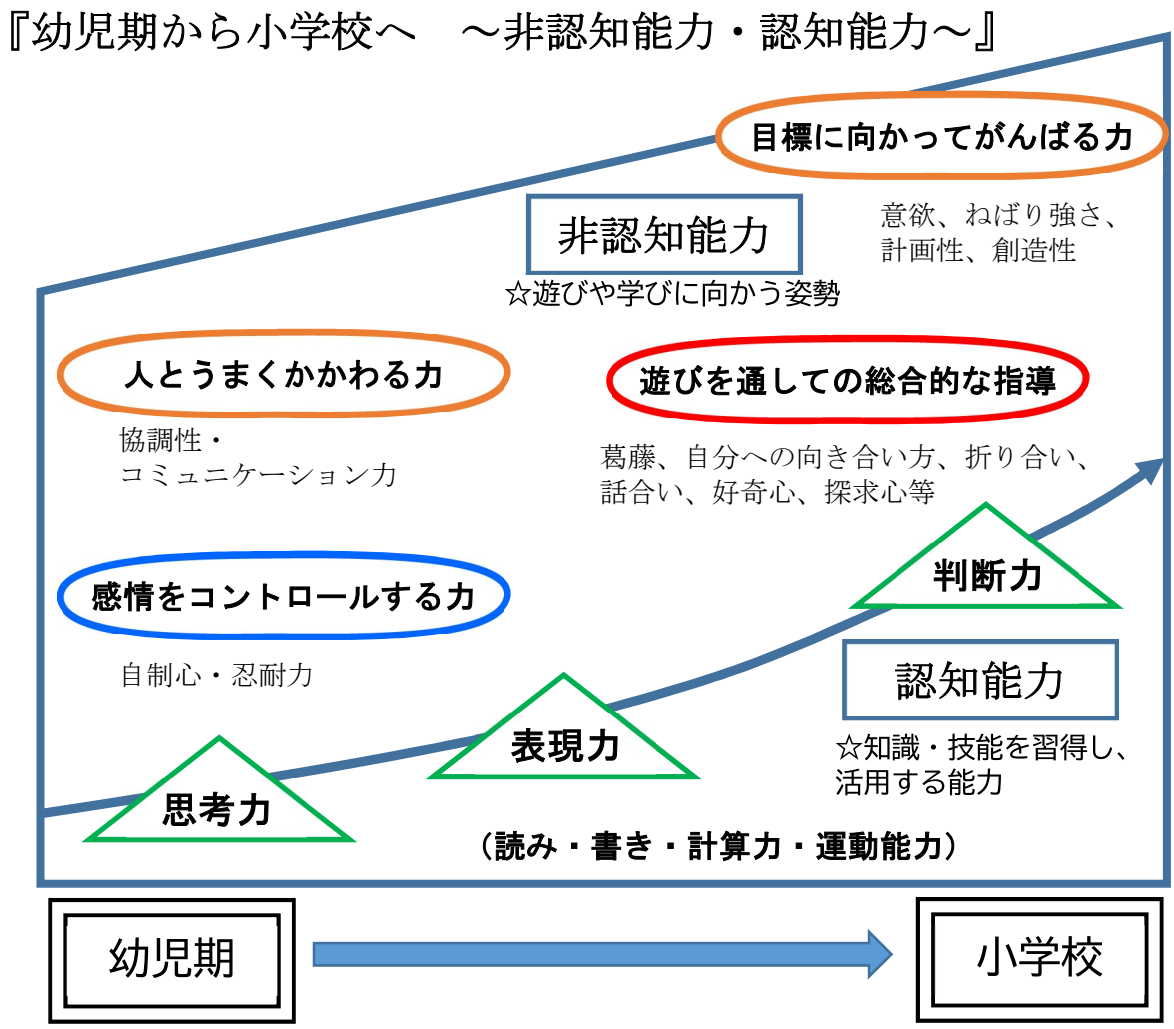
⑵　幼稚園から小学校へ、幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿の発信

①　将来にわたって生きて働く非認知能力の明確化

湯本幼稚園としては「感情をコントロールする力」「人とうまくかかわる力」「目標に向かってがんばる力」の３点を園児にとって大切にしたい非認知能力とした。

これらを育んでいくために、遊びを通しての総合的な指導と、これら３つの力を単体ではなく組み合わせて指導してきた結果、「できた・分かった」という自己肯定感を高め、主体的に取り組む姿勢を育むことにつながっていることが確認できた。

この関わりを可視化したのが、下記のモデル図である。



②　連携している姿や遊びの場面の可視化

・保育の中で見られた「10 の姿」に関する園児の姿を見取り、写真を幼稚園の廊下に掲示した。
・小学校の教師だけでなく、児童までもが、園児の遊びの意図を捉え、保育士に質問したり、話題にしたりすることがあった。
・保護者への説明責任を果たす役割も担っている。

『遊びが学び』 ～ アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの相互理解にむけて ～

天栄村立湯本幼稚園

10の姿	1 健康な心と体	2 自立心	3 協同性	4 道徳性・規範意識の芽生え	5 社会生活とのかかわり	6 思考力の芽生え	7 自然とのかかわり・生命尊重	8 数量・図形文字への関心・感覚	9 言葉による伝え合い	10 豊かな感性と表現
生活科	 朝の会 朝の運動に参加しようとする 小学生の司会による朝の会に加わろうとする			 交通教室 交通ルールを知り、それを守ろうとする気持ちをもとうとする	 街中探検 近所に住む方々とかかわり、会話を楽しもうとする	 絵本の世界 絵本を読んで、自分が絵本の主人公になって遊ぼうとする	 春をさがそう 季節を感じながら、春に咲く花や虫を見つけようとする	 ボードゲームで遊ぼう サイコロや何マス進む等、遊びの中で自然に数字に親しもうとする	 おうちごっこ 自分が何の役をやりたいのか、相手に伝えたり相談したりしようとする	 絵を描こう お母さんの顔は確かこうだったなと思い出しながら伸び伸び描こうとする
各教科等	 （体育） 色々な道具を使い、身体を動かすことを楽もうとする	 （図画工作） こうしてみたいというアイデアを、紙に描いていこうとする		 （体育） 小学生の姿を見て、自分も泳いでみたい、水遊びをしてみたい気持ちを持とうとする	 （国語） 司書の方とかかわることで、本について、詳しく面白い話が聞こうとする	 （理科） 自作の望遠鏡で、どこまで見えるか何を発見できるか楽しもうとする	 （理科・道徳） 自然観察等の経験から、花や葉を見つけてみようとする	 （算数） 小学校の、身の回りにある物の数を数えようとする	 （家庭科） 小学校高学年の家庭科実習で、料理をしてみたいと思えるようにする	 （音楽） 小学生と一緒に音楽を聴きながら、イメージをもって体を動かそうとする
基本的な生活習慣	 <挨拶> 毎日の積み重ね。元気よく「おはようございます。」の挨拶を自分からしようとする	 <掃除・片付> 遊んだ後は、綺麗に後片付けをしようとする	 <給食当番> 年長児の姿を見ていたら当番活動をまねて手伝おうとする	 <話を聞く> 外部講師の方の話を落ちついこうとする	 <来客と話す> お客様に会ったら元気に挨拶しようと心がけている	 <お話を見る> 自分たちでもやってみようとする。見てもらいたい気持ちをもとうとする	 <砂で遊ぶ> 思い切り外遊びを楽しもうとする	 <お手紙を書きたいな> 郵便ごっこで、〇〇ちゃんにお手紙を書こう！と、楽しもうとする	 <園外保育> 車でお出かけ。訪れる場所で、初めてみる植物に不思議さを感じられるようにする	 <季節の行事> 昔ながらの行事を大切にし、自分も今後伝承していきたいと考えられるようにする

幼稚園の活動が、小学校の教科学習や生活にどうかかわっていくのかを整理した。園児の遊びが、小学校のどんな活動に結びつくのかを知ることができた。また、小学校の先生にとってみれば、園児の遊びが、将来、小学校の学びの何につながっていくのかを知ることができた。このマトリックスが、幼稚園・小学校の双方の先生方が共通認識を深める手掛かりになった。８月、幼教研で回覧された資料の中に、この取組に関する資料を確認した。

【参考資料】　白梅学園大学徳仁教授　白梅学園大学大学院名誉教授　無藤　隆　先生
「幼児教育の実践プロセスのロジックモデルの捉え方」より

そもそも、資質・能力や 10 の姿については、それらが明示された 2017 年の幼稚園教育要領改訂以前から、園生活の中で幼児がどのような学び・育ち・姿を示しているかは、たくさんの実践研究が行われており、そこで分かることもあるが、**それらを整理していく作業が足りていなかったように思われる。**　（中略）　小学校とのつながりにおいても、幼児教育でこのような学びがあるということを説明する際、いくつかの例を挙げて伝えると、そこで理解して分かる人もいるが、分かりづらく感じる人も多い。なぜなら、小学校は教科教育であるため、**その教科に関連したことが幼児教育の中にどの程度あるのかを知りたい**と感じるためである。その時、**10 の姿をもとに説明すれば、そこには教育につながることについても書かれているので、より分かりやすく伝え**ていくことができる。

（※太字・書体の変更、アンダーラインの追加は、本園教諭が行った）

Ⅳ　成果と課題

１　幼児教育施設と小学校間における相互理解の促進

【成果】

・　小学校の中に幼稚園が設立されているという好条件を生かすためには職員間の連携が大切であり、日常的な情報交換でお互いの取組が分かり、「ぜひ、一緒に活動したい」という思いから、多様な教育活動を実践することができた。

・　小学生も幼稚園児とかかわることによって、年齢の低い子に対する配慮、伝え方等の異学年に対して伝えようとする技術が身にいた。授業の中だけではなく、日常生活の中でも、伝えよう・伝えたいという能力を伸ばすことができた。

【課題】

・　同年代の友達と関わる機会が少ない。いつも同じ決まった人間関係の環境であるため、コミュニケーション能力と社会性をいかにして育み支えていくか少人数ならでは難しさである。今後、異学年集団や地域の方を交えた活動を工夫していかなければならない。

２　架け橋期カリキュラムの開発・実施

【成果】

・　マトリックスの活用や 10 の姿の整理により、幼児の遊びの姿から小学校での学びにつながることを意識することできた。

【課題】

・　教育行政・幼稚園・小学校の職員と話し合う機会を設け、アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの整備に取り組む必要がある。

Ⅴ　今後に向けて

小学校側が幼稚園の取組や園児の遊ぶ姿から、３つの資質・能力の基礎を養っている姿に気づき、学ぶことが多かった。この点においても、幼小連携のメリットが感じられた。

今後、情報の共有等を日常的・計画的に行う体制を整備し、お互いの取組を理解して保育活動ができるよう研究を深めていきたい。